

JSIR news letter

国際リハビリテーション研究会

vol.24 2024年7月28日発行



巻頭言

多様な社会と多様な地域づくり

林 寿恵 (国際リハビリテーション研究会事務局、
熊本県阿曾温泉病院)

〔巻頭言〕
多様な社会と多様な
地域づくり

林寿恵

〔特集〕
医療をアップデートする
北原グループの取り組み
亀田佳一

〔連載〕
研究万華鏡：
レビュー論文つれづれ
山口佳小里

〔コラム〕
世界のめがね：
～熱い国での仕事～
大室和也

〔お知らせ〕
・ SNS開設
・ 第8回学術大会
・ 学術誌投稿

私はJOCV協力隊のOGです。2年7ヶ月を任国パキスタンイスラム共和国で過ごしました。それが国際リハに興味をもつ、また地域リハビリテーションにはまるきっかけでした。生活や活動にて、日本で得たものは全く通じず、それどころか何もない(物も味方も)のに悩みましたが、時間の経過とともにコミュニケーションの取り方や交渉の方法、課題解決への模索、仲間づくりなど、失敗もありましたが学びの多い日々でした。帰国した日本は想像以上に【きちんとした】国であり、融通のきく任国が懐かしいとさえ何度も思いました。帰国して約20年がたち、最近では人口減による、システムはあっても人がいない、出来ない、を地方在住者はひしひしと感じています。周囲には技能実習生も多く、日本国籍外の方と働く機会も珍しくありません。

帰国間もなくの日本と大きく変わりました。人口減における業務の見直しや街づくりへの関心度も高くなっています。今こそ、任国で学んだ【どうしたらいいのか?】の壁を超えるアイデアと行動を発揮するときだ!と意気込み中です。日本での多様な地域づくり、わくわくしています。



【特集】医療をアップデートする北原グループの取り組み

本号では、海外・国内を問わずとても興味深い活動をしている北原グループの取り組みを紹介します。私たちがさまざまな国や地域にリハビリテーションを持続的に提供するためのヒントを得ることができます!

最後に紹介されている**いろどりの丘**では、今年11月に当研究会の学術大会が開催されます。本特集を読んで、ぜひ現場にも足を運んでください!

また、当研究会では北原グループとスタディーツアーを計画しています!今後の情報にご注目ください!!

学術大会について詳しくはこちら!

学術大会 HP



【特集】医療をアップデートする北原グループの取り組み

執筆者 亀田佳一（北原グループ 株式会社KMSI 取締役）

医療途上国に地産地消の医療を構築する

北原グループの海外事業は持続可能な医療を途上国に構築することを目指しています。その実現のために、現地の方々が自立して医療提供できる臨床力を身につけることに加え、無理なく続けられるよう医療をビジネスとして成立させることに注力しています。現在はベトナム、タイで事業を開始していますが、本コラムでは私たちの海外事業の始まりのカンボジア事業についてご紹介します。

私たちがカンボジアへの進出を決めたのは2009年。当時、内戦の影響でカンボジアの医療は質、量ともに厳しい状況でした。富裕層は医療を受けるためにタイなどに渡航し、本来、国内で医療に使われるはずのお金が国外へ流出するため、国内の医療は発展しにくい状況にありました。富裕層は海外に渡航して助かり、貧しい人は見殺しにされる、現地でそんな場面を何度か目の当たりにしました。

そんな状況を改善するために、私たちは地産地消の病院 Sunrise Japan Hospital (SJH) をカンボジアに開設することを決めました。当時は日本の病院の海外事業は法的に認められておらず、前例もなかったため、手探りで道を切り開くしかない状況で、調査含め、開設までに約8年かかりました。法的整備がされていないなか、許認可、敷地の選定、設計、建築、採用など様々な課題をクリアし、2016年ようやく開院することができましたが、質を担保するために、開院当初は病院運営に必要な全臨床職種に加え、経営スタッフ、SEなど30名近くの日本人が駐在し病院運営をしながらカンボジア人の教育を続けました。

現在、カンボジア人が成長し、駐在する日本人の数は約半数まで減らすことができます。外資系病院としては珍しく、中流層を含む現地の方々を対象にしているにも拘らず、黒字転換しており、さらなるニーズに応えるために2023年には同市内に外来専門のクリニックもオープンしました。ありがたいことに日本医療輸出の成功モデルとして日本政府からも国内外に紹介されるようになりました。この実績が追い風となり、2017年にはベトナムで、2023年にはタイで、道半ばですが事業を開始しています。また2023年からは中央アジアの調査を開始しています。

私が海外事業にかかわって12年経ちましたが、その間、アジアは急速に発展します。一方、30年間停滞し、新しいものを生み出せなくなった日本は、医療を含むあらゆる面で他国に対して優位性を失いつつあります。この状況を好転させるためには、これまでの高額な医療機器に頼った重厚長大な医療ではなく、世界一の高齢国家というアドバンテージを活かした日本ならではの新たな医療の創造が必要なのではないでしょうか。北原グループは新たな医療の創造のために日本国内でも様々な取り組みをしています。次は、国内での取り組みについてご紹介します。



カンボジア人PTに教育する執筆者



Sunrise Japan Hospital



Sunrise Japan Hospitalスタッフ

「医療を総合生活産業に」北原グループの国内事業

東京都では、脳と心臓の疾患に予防、救急医療からリハビリ、在宅フォローまで一貫した医療を提供し、上位3位に入る脳卒中患者への治療実績を持つ病院が北原グループの母体です。北原グループは国内でも病院の枠を越えて様々な事業に取り組んでいます。海外事業もそうですが、このように様々な事業に取り組んでいる病院グループは非常に珍しいと思います。みなさんも、北原グループがなぜ、こんなことをしているのか、疑問に思うのではないのでしょうか？

それは国民皆保険、診療報酬制度を基盤とした日本の医療が今後継続困難になると考えているからです。少子高齢化に伴い、医療を必要とする高齢者が増える一方で、医療財源は減っていく、当然、現在の医療体制を維持することは難しく、すでに何年も前から診療報酬総額の減少が始まっています。北原グループは、かなり壮大なビジョンですが、現状の体制がなくなっても、「よく生きよく死ぬる幸せな社会」を作ろうとしているのです。医療というと病院という閉じられた空間の中で行われるものという印象が根強いですが、私たちは医療は生活全般にかかわり、人を幸せにする総合生活産業と再定義し、様々な取り組みをしています。その取り組みの一部を紹介します。

北原トータルライフサポート倶楽部

トータルライフサポート倶楽部は、生活上起こりうる、あらゆる問題に対して適切なサポートを受ける事ができる会員制のサービスです。会員は基本医療情報、生活の情報、経済情報、認証用の生体情報、本人が何を望んでいるかという意思の情報など様々な情報を登録し、その情報に基づき、医療・介護だけでなく生活全般にわたって会員が幸せに生きるための様々なサポートを受けることができます。2017年から東京都の八王子市でサービス提供を開始しており、現在、個人会員約500名、福利厚生として企業のサポートも始めています。



トータルライフサポート

デジタルホスピタル

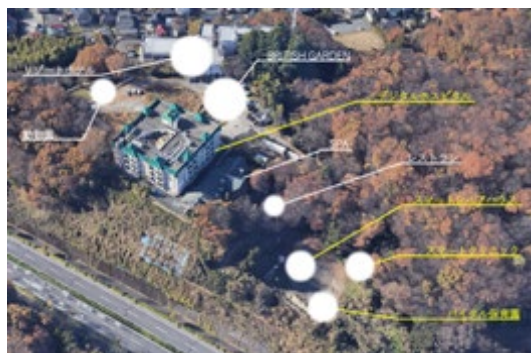
デジタルホスピタルは北原グループが目指す「総合生活産業としての医療」に必要なAIやシステム開発を目的とする事業で、現在も様々な企業や大学と様々な共同研究開発を行っています。また、病院での治療が必要となった方に高品質・低価格な医療を提供できるように最終的には病院そのものを、患者の状態を把握し治療する機能を持つ全自動運転病院に進化させることも目指しており、その研究開発も行っています。



NECと開発したリハビリ支援AI

ヒーリングファシリティ

ヒーリングファシリティは、北原グループが目指す「よく生きよく死ぬる社会」を実現するために必要な様々な要素を散りばめたハイエッジエリアです。ここに身を置くだけで自然治癒力が高まり健康になれる空間であると同時に、開発中のシステムやサービス実証の場、国内外へ情報を発信するショールームの役割も担っています。



ヒーリングファシリティ計画

上記取り組みは、北原グループの本拠地である東京都八王子市で行われているものですが、八王子市以外にも国内に事業サイトをいくつか持っています。その一つが国際リハビリテーション研究会 第8回学術大会の会場の「いろどりの丘」がある宮城県東松島市です。

いろどりの丘 -過疎化が進む地方社会で持続可能な社会モデルを構築-

「いろどりの丘」は宮城県東松島市にある「みんなが集い、楽しみ、健康になる、新たなライフスタイルの発信基地」をコンセプトに、レストラン・カフェ、お風呂・岩盤浴、ホテル、様々な用途に使える多目的ルーム、みんなで創るガーデン、クリニックや介護施設（小規模多機能型居宅介護施設）が一体となった全く新しい施設です。いろどりの丘がある東松島市は2011年の東日本大震災で津波の被害に遭いました。今ではインフラやハードは整備され生活は復旧しましたが、まだ、文化や産業、精神的に豊かな生活は戻っていません。北原グループは震災直後から10年間、現地で医療を提供しながら住民と話し合い、必要なものは何か、自分たちにできることは何かを考えてきました。そうして辿り着いた答えは、ただ文化を取り戻すのではなく、少子高齢化や医療資源不足という課題も解決できる、健康に生きるための叡智を加えた新たな文化を創ることです。いろどりの丘でやろうとしていることは「幸せな人々が暮らす豊かな社会」という新たな文化を住民と共創し、施設周辺の住民の生活を豊かにするだけではありません。少子高齢化や医療資源不足といった東松島市が抱える課題は、日本の地方社会の共通課題でもあります。いろどりの丘で成功モデルを作ると同時に、日本全国の地方社会の課題を解決することを目指しています。

みんなで創る癒しとくつろぎの家

家族の形や地域コミュニティの在り方が多様化する昨今、暮らしの中での心の拠り所が失われつつあります。いろどりの丘は、地域の住民が集まり、楽しいことも、悲しいことも、困っていることも、その一つ一つを共有し、必要に応じた対応をみんなで考えていく場所として作られています。

あらゆるボーダーを取り除く

いろどりの丘に集う人々が、助けて欲しい時、挑戦が必要な時に声を上げやすいように、ここでは、現代社会が作り上げてきたあらゆるボーダーを取り除くことに挑戦しています。店員と客、大人と子供、男と女、日本人と外国人、あらゆる方々が癒しとくつろぎの中で、ボーダレスな関係を築けることを目指しています。

安心安全な社会基盤、文化と教育の再構築

いろどりの丘は、最小限の設備と人員で、効率よく様々なことを行えるように作られています。レストランや岩盤浴などの商業施設と同じ屋根の下には診療所や介護施設もあり、必要な人は医療や介護サービスを含めた様々なサポートを利用することができます。

また多目的ホールでは文化活動や教育を行ないます。ここでは、ものづくりなどの文化活動をとおして、人、物、動物や自然などを尊重することができる豊かな想像力を身につけるための経験を提供しています。

北原グループはいろどりの丘で成功モデルを作り、日本全国、さらには世界で展開することで、「幸せな人々が暮らす豊かな社会」を拡げていくことを目指します。

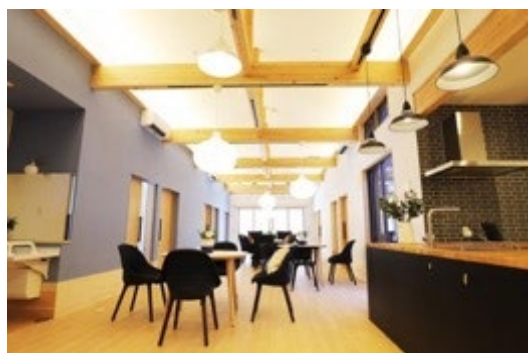
海外事業以外にも様々な取り組みをしている北原グループの取り組みについて、詳しく聞きたい方はぜひお問合せください！



いろどりの丘外観



みんなが集うレストラン・カフェ



小規模多機能居宅介護

レビュー論文つれづれ

「研究に興味があるが何をすればよいのかわからない…」との声にお応えし、気まぐれに研究について綴ります。

事務局では本連載で取り上げてほしいテーマを募集しています。希望テーマがありましたら、事務局までぜひご連絡ください。

さて、今回は論文種別の1つであるレビュー論文について書いてみようと思います▼今日におけるレビュー論文は、ナラティブレビュー（いわゆる総説）、スコーピングレビュー、システムティックレビューの3つに大別されます。ナラティブレビューは特定の領域やテーマに関する知見を概説するものです。皆さんにとっても一番馴染みがあるでしょうか▼システムティックレビューは、明確なリサーチクエッションに対して、系統立った方法論を用いてレビューを行うものです。さらに、システムティックレビューの一種であるメタアナリシスは、端的に表現すると、数々の先行研究で行われた効果検証などの調査をまとめて分析するような手法であり、統計的分析による新たな結果を伴う種別と言えます▼スコーピングレビューは2000年以降に方法論が開発された比較的新しいレビュー論文です。システムティックレビューほど厳格ではありませんが、系統だったプロトコル、明確な検索手法に則って、先行研究を調査・整理するものになります。結果が記述的にまとめられても良い点はナラティブレビューに近いかもしれませんが▼Cochrane Review（コクランレビュー）¹⁾はEBM（Evidenced Based Medicine）の考えに基づいて行われたシステムティックレビューを多く搭載したデータベースで、リハビリテーションに関するレビューも多数掲載されています。また、CochraneとWHOは提携関係にあり、WHOのガイドライン等にもCochrane Reviewの結果が用いられています▼ご自身の目的に合わせて、上手に論文を見つけられるとよいですね。（国立保健医療科学院 山口佳小里）

1) Cochrane Library : <https://www.cochranelibrary.com/?contentLanguage=eng>

「コラム」『世界のめがね』

～ 熱い国での仕事 ～

大室和也

(AAR Japan [難民を助ける会])

世界中で活躍を展開している
会員のめがねを通した
世界の姿を各号お届けします。

今回は、**カンボジア**からです。

「エネルギーがいたるところで渦巻いている」カンボジアに到着したばかりの頃、そのように感じたのを覚えています。こちらで仕事を始める前は、九州の秘境・佐賀で勤務していたので、街の雰囲気の違いに圧倒されたのだと思います（ちなみに佐賀のことは好きです）。そのカンボジアで私は、月に一度、地方に住む障がいのある大人や子どものお宅を訪問し、自宅でできるケアの方法を伝えたり、学校や社会活動への橋渡しを検討したりしています。「日本でいうところの就労B型があればなあ」「訪問リハや訪問看護があればなあ」「貧困世帯への補助制度が充実していればなあ」と様々な想いが浮かんできます。なければ作ろう、というのが国際リハ研究会の精神かもしれませんが、言うは易く行うは難し。できるところから、色んな人とともに、ようやく第一歩を踏み出したところです。ぜひみなさん、このエネルギーを肌で感じにカンボジアに来てください。

◀ 遠くに見えるビル群が首都プノンペン。
そこに向かって流れる川にも力と意思を感じます。



[お知らせ]

【X・Instagram公式アカウントを開設しました！】

タイムリーに情報発信していきますので是非フォローをお願いいたします



【国際リハビリテーション研究会第8回学術大会 一般演題登録・参加登録受付中！】

テーマ：国際リハビリテーションにおける地域共創～海外と国内の経験を共有しよう～

日程：2024年11月17日（日）10:00～16:30

会場：いろどりの丘（宮城県東松島市野蒜ヶ丘）

参加費：会員2,000円 非会員3,000円 学生1,000円

学会HP 一般演題はこちらから 参加申込はこちらから

学術大会 HP



【学術誌『国際リハビリテーション学7巻1号』投稿論文受付中！】

投稿締切：2024年8月11日(日) 詳細についてはHPをご確認ください

【国際リハビリテーションセミナー2024・第7回通常総会開催しました！】

ご参加いただいた多くの皆様ありがとうございました。

詳しくは開催報告をご確認ください。



編集後記

- ・北原グループの国内外における事業の概要、その苦難の道のりを知る良い機会となりました。日本と海外、相互に行う国際協力の1つの形が体现されている記事だと感じたので、ぜひ多くの会員様に目を通していただきたいです。（高橋佳太郎）
- ・「言うは易く行うは難し」本号内にそんな言葉がありました。各地で難題に立ち向かい、長い年月をかけ、実践されておられる執筆者の皆さんの姿に、とても大きなエネルギーをいただきました。今年11月の学術大会が楽しみです。（大西海斗）

事務局 編集担当

大西 海斗（コーエイリサーチ&コンサルティング）

長田 真弥（姉ヶ崎ヶアセンター）

高橋 恵里（福島県立医科大学保健科学部）

高橋 佳太郎（JICA海外協力隊、チリ派遣）

古川 雅一（仙台医健・スポーツ専門学校）

三田村 徳（東北医科薬科大学病院）

JSIR HP

【研究会HP】 <https://int-rehabil.jp/>

【お問い合わせ】 国際リハビリテーション研究会事務局
jsir.office@int-rehabil.jp

